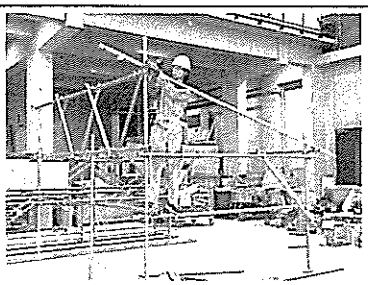
埼玉新聞
2026年（令和8年）11月6日 金曜日

知・技の創造 ものづくり大学発 ▷130◁

建設業の未来は若き技能者が

三原 斉 技能工芸学部建設学科 教授


3級とび技能検定練習風景（ものつくり大学三原研究室提供）

建築物は設計図だけでは完成しない。設計者や施工管理技術者が持つ「建築技術」と、技能者が現場で材料と向き合い、自らの手でつくり込む「建築技能」が結び付くことで、初めて一つの建築物が形になる。建設業では今、担い手不足や技能者の高齢化、生産性向上、デジタルトランスフォーメーション（DX）への対応などが大きな課題となっている。そのような時代だからこそ、若いうちから技能を身に付け、ものをつくる経験を通して建築技術を理解する人材を育てることが重要である。



若者が自らの技能を高める一つの道が「技能検定」である。建築大工、左官、タイル張り、とび、鉄筋施工、型枠施工など、建築には多くの技能職種がある。技能検定では、実技と学科の両面から能力が評価され、合格すると「技能士」の称号が与えられる。実技試験では、図面を読み、決められた時間内に材料を加工し、要求された精度と品質を備えた作品を完成させる。そこでは手先の器用さだけではなく、図面を読み解く力、材料の知識、工程計画、精度管理、安全管理、時間管理まで求められる。つまり、技能を通して建築技術を理解することは、同時に建築技術を学ぶことでもある。

その先にあるのが「技能五輪全国大会」である。若い技能者たちが技能日本一を競う、いわば「ものづくりの甲子園」だ。建築大工、左官、タイル張り、配管、家具、造園などさまざまな職種で選手たちは日頃磨き上げた技能を競い合う。大会で求められるのは、ミリ単位の精度、美しい仕上がり、作業の速さだけではない。課題を理解し、自ら工程を考え、予期しない問題にも対応しながら、最後まで作品を完成させる力が必要となる。選手たちは仕事や学業と両立しながら厳しい訓練を重ねており、その経験は若く、人としても大きく成長させる。さらに全国大会の先には、世界の若者たちが技能を競う「技能五輪国際大会（World Skills Competition）」がある。建築大工、左官・ドライウォール、タイル張り、れんが積み、配管、電工、冷凍空調などに加え、ビルディング・インフォメーション・モデリング（BIM）を活用するデジタルコンストラクションといった新しい職種も実施されている。2028年には愛知県で国際大会が開催され、世界最高水準の技能を日本で直接見ることができる。

技能五輪の価値はメダルだけにあるのではない。大会を経験した若者たちは、その後、第一線の技能者、施工管理技術者、技術開発者、指導者などとして幅広く活躍していく。BIM、ロボット、人工知能（AI）など、建設業にもデジタル技術が急速に広がっている。しかし、新しい技術を現場で本当に役立てるには「建築物がどのようにつくられるのか」を理解している人材が不可欠である。

若いうちに材料に触れ、工具を使い、失敗を重ねながら、自らの手でものを完成させる。その経験は、教科書やデジタルだけでは得られない「ものづくりの知」を育てる。建設業の未来は新しい技術だけがつくるのではない。技能と技術の双方を身に付け、自ら考え、自らの手でものをつくることのできる若者たちこそが、未来の建設業をつくっていくのである。

みはら・ひとし 近畿大学卒業。工学院大学大学院博士課程修了。博士（工学）・一級建築士・一級建築施工管理技士。村本建設株式会社を経て2001年から現職。専門は建築生産、建築技術技能教育。